
僕らの相対論 2 シュレーディンガーの猫の章

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの相対論2 シュレーディンガーの猫の章

【Nコード】

N90950

【作者名】

北川ライム

【あらすじ】

僕らの相対論、第2弾。

工科大に通い、物理学を専攻する二人のルームメイト、光瀬と比奈木。

今日も何気ない会話から、ほんの少し奇妙な展開が始まる。

珍しく映画に誘ってきた光瀬は、その映画のラストシーンが「シュレーディンガーの猫」のようだという。

理論物理学者エルヴィン・シュレーディンガーが提出した有名なパラドックスだ。

しだいに比奈木は、熱く語る光瀬の話に引き込まれていく。
そんな時、二人は、彼らと一緒に住んでいる14歳の少年、ソラが
同級生に虐められている現場に遭遇する。光瀬がとった意外な行動
とは・・・。

（ご注意）

この作品の中には2010年、6月に公開された映画「告白」のネ
タバレが書いてあります。まだこの映画を観てなくて、そしてこれ
から観ようと思ってる方は、どうか2話を飛ばして読んで
ください。

第1話 巻き込まれる

「やっぱりR15指定ってだけはあったな。なんか、最後クラクラした」

映画館を後にしながら僕は光瀬に言った。光瀬も頷く。

「原作の小説よりもかなりグロかったんじゃない？ 血しぶき半端ないもんな。やっぱりソラを連れてこなくて良かったよ」

光瀬はそう言いながらも楽しそうだ。

こうやって光瀬と二人で映画を見るのは初めてだった。

ルームシェアし、共同生活しているとはいえ、休日に二人で出掛けることはあまりない。

それなのに、こういう風の吹き回しか、今朝になって僕の部屋に入ってきた光瀬が、

「なあ比奈木、この映画観に行こう。こんなの貰ったんだ」

そう言って大学生200円引きの映画の割引券をピラピラさせた。

けっこう話題になっている『告白』というサスペンス系映画で、僕も気にはなっていた。

だが、まさか普段映画なんか興味無さそうな光瀬が誘ってくるとは思っても見なかった。

「あ、いいなあ。二人で映画行くの？ ボクも行きたいな。ちょうど学校も部活も休みだし」

僕が返事をする前に、後から顔を覗かせたソラが羨ましそうにつぶやいた。

そうなのだ。ソラはまだこの部屋に居候している。

僕と光瀬がルームシェアしているこの2Kのアパートに「ちょっとの間」と言うことで光瀬が連れてきたこの14歳の少年は、一ヶ月

経った今も、まだ居る。

彼の姉の海外研修が伸びてると言うことなので、仕方がない。

ソラは恐縮がつているが、よく気が回り、掃除、片付け、朝食まで作ってくれるその少年を、僕はとても気に入っていた。

寝起きは光瀬の部屋でしていることだし、僕に何の支障もない。ずっとこのままいてくれればいいとさえ思う。

そんな少年の願いも、何ともかわいい。

「ソラも連れて行こうよ」

と僕が提案すると、意外にも光瀬は、

「ダメだよ、R15指定なんだから。ソラは14歳だ」と、風紀委員のように腕組みをした。

そんな杓子定規なヤツだっただろうか。

そんなこと気にしなくても、と弁護する僕に、ソラは「いいんです。

僕、やっぱり血とか苦手だから」と

健気に引き下がった。

僕は後ろ髪を引かれながらも素直な弟分の頭を撫で、光瀬と二人、出かけたのだった。

「復讐モノの中では、僕は好きなタイプの映画だったけど、やっぱり中学生には見せるの迷うよね」

僕がそう言つと光瀬は、

「そうか？ あの演出は芸術だよ。純粹にあの演出の巧みさを中学生にも味わって欲しいと思うけどなあ」と、やはり楽しげに言った。あれ、今朝と話が違う。

14歳だからダメだと真面目に却下したのは光瀬なのに。

まあ、彼は彼なりに、友人の弟を預かる保護者として自覚をもっているんだろう。

そういう律義なところは、少し見直した。ただの物理バカではなかったのかもしれない。

まだ昼過ぎだったが、二人とも遊び回るほど金があるわけでもなかったので真っ直ぐ帰ることにした。
そこからは電車よりもバスの方が乗り換えも無くて早い。僕らはバスターミナルに並んだ。

「でもさ、俺思ってたんだけど」

光瀬が思い出したように口を開いた。

「あの映画のラストシーンはまるで、あれじゃね？」

「ん？ あれって？」

「シュレーディンガーの猫」

「・・・は？」

また光瀬は妙な事を言い始めた。

「シュレーディンガーの猫って、あのシュレーディンガーが提出した有名なパラドックスだろ？」

「そう。波動方程式を完成させ、量子論にめちやくちや貢献したにもかかわらず、彼は量子論の曖昧さが大嫌いだった。そこで提示した思考実験だよ」

「え？ どころ辺が映画と重なるんだ？ ミクロの量子の世界の奇妙な法則を、マクロの猫に当てはめて、『ほら、変でしょ？』って言ったんだよね」

「そつだ。量子の不思議な『重ね合わせ』を猫に反映したんだ」

僕は、数ヶ月前読んだ科学雑誌での記述を思い出してみた。

この「シュレーディンガーの猫」の仕組みは簡単だ。

（もちろん思考実験なので、実際に実行するわけではない。）

まず、鉄の箱の中に、猫と放射性物質と放射能探知機、そしてそれ

に連動した青酸ガス発生器を入れてフタをする。放射性物質は1時間の間にある一定の確率で原子核崩壊を起こし、放射能を放出する。もしも放射能が放出されれば検知器が働き、青酸ガスが発生し、猫は死んでしまう。

もちろん、原子核崩壊が起こらなければ猫は元気である。

ここで1時間後フタを開けた瞬間、猫の生死は分かってしまう・・・というのは当たり前のこと。

けれどもこの実験の奇妙なところは、フタを開ける前の状態についてだ。

フタを開ける前の猫は、生きているか死んでいるかのどちらかではなく、「生きている」状態と、「死んでいる」状態の両方であるということ。

なぜなら、そのきっかけとなる原子核の崩壊というのはこの世界とまるで法則の違う、量子の世界の出来事。

観測者が観測するまで、その結果は存在しないのだ。

これが量子の「不確定性の法則」。

原子核崩壊は、観測した瞬間に決まるのであって、観測する前は何の決定もされない。どちらでもないわけだ。

これこそアインシュタインが量子論の学者達に嫌みっぽく言った、「君は、君が見ているときだけ月がそこに実在すると、本気で思っているのかね？」

と言った、事柄なのだ。

観測するまで原子核は崩壊しているし、崩壊していない。

だから猫も、死んでいるし、死んでいない。

両方の『重ね合わせ』なのだ。

そして、フタを開けて確認した途端、結果が決定され、それまでの時間が巻き戻り、その事実収まる。

観測する前は何の決定もされていないというのだ。

これが何とも不思議な素粒子の世界。つまり量子の世界。

そう。ミクロの世界はこういう不思議なものであり、「なぜ？」なんてことは学者ですら分らない。

けれど量子論の学者達は「そういうもんなんだから、理解しろ」と言い張る。

だからアインシュタインやシュレーディンガーは量子論を嫌ったんだ。

シュレーディンガーは『納得のいかないモヤモヤ』を示すためにこのパラドックスを提出した。

ミクロの量子の現象をマクロの猫に反映させてみたんだ。

「ほら、猫って、フタを開ける前は死んでいるか生きているかのどちらかでしょ？ 生きていながら死んでいるなんて事、あり得ると思うかい？ だから、量子論は間違ってるんだ」と。

結果的に、量子論が間違いでないことは証明されている。

けれど、「生きながら死んでいる」状態がありえるとも思えない。両方間違っていないとすれば、この奇妙な結果はどう見ればいいのかも知れない。

一見すればシュレーディンガーの負けに見えるが、量子というものはまだ、完全に解明されてはいない。

と、いうことは、このパラドックスも実は完全に崩れてはいないのかも知れない。

「それで・・・」

僕はチラチラと、腕時計とバスの時刻表を交互に見ている光瀬に聞

いてみた。

「さっきの映画の何がシュレーディンガーの猫なんだ？」

光瀬はゆっくりと視線を僕に合わせ、にんまりと笑った。

ああ、また今日もこうやってこいつを嬉しがらせてしまう。

いつだってこうやって光瀬の歪んだ物理の世界に引き込まれていく。いや、これは何となく予感なのだが、もう朝の段階で僕は、彼の仕組んだ何らかのカラクリに巻き込まれていたのかも知れない。

第2話 映画のラストシーン

バスのシートに並んで座りながら光瀬は解説し始めた。

「ほら映画の最後、主役の女教師は少年Aに『お前の母親を殺した』と仄めかしたろ？ 少年Aに復讐するために。実際にはそれは想像をさせるようなニュアンスでしかなかったけど」

19歳という年齢よりも大人びた外見、高身長、さらに確実にイケメンの類に入る光瀬と並ぶのはやっぱり嫌だ。

中学生にさえ間違えられる僕のコンプレックスをかなり増長する。けれど、こんな風に好きな部門の話をさせたら途端に光瀬は幼くなる。

面白い遊びを思いついた子供と一緒にだ。

僕は「声が大きいつてば」と指を口に持っていくジェスチャーをし、自分も声のトーンを落とした。

「うん、言った。あの回想シーンは迫力あったな。息ができない感じ。倫理とか悪だとかを通り越した感覚だったな。実際あの言葉で少年は崩壊したんだと思う」

「そうだろ？ でもさ、あれは全くあの先生の作り話かもしれないだろ？ 実は殺してないのかもしれない」

「それも有り得るな。そうだとしたら、またちよつと違ったテイストの話になるよね」

「そうなんだ。観客の頭の中ではどちらのストーリーも展開されている。殺されてる方と、殺されていない方。監督が答えを出さない限り、そのどちらでもあるって事」

「ああ、そうか。監督が『実はこうでした』って言った瞬間に事実が決定するんだね」

「そう。それまでは白であり、黒である。もうどちらかに決まっていたわけじゃないんだ」

僕はなるほど思った。

確かに似ている。例題としてはかなり良いかもしれない。けれど盲点もある。

「でもさ、監督の頭の中では白か黒か分かってたんだろ？ だったらやっぱり決定してたんだよ。フタを開ける前に」

「監督はそんなこと決めてないさ。そんなこと決める必要は全くないからね。でも本当はどっちだったんですか？ って聞かれたら、仕方なくその場の気分で答えるんだ。それが結果だよ。実験結果だ」

「仕方なくその場で決める・・・か。観測における『神』の役割みたいだな」

「そうだよ比奈木。量子のふるまいを決めるのはそんな『神』かもしれない。量子が確立でしか感じ取れないのは、いたずらな神さまのせいだ」

あれ、話がまた飛んだ。

僕は苦笑いを返す。

「話が哲学かファンタジーの分野に入ったよ光瀬。物理学に神様を出してきたら話が進まないって」

そう言うとき光瀬は眉間に皺を寄せて僕を凝視した。

元々整った造りの顔だけに、そんな風にしてもやはり男前だ。正直、神様は不公平だと思った。

「違うよ比奈木。物理はロマンだ」

なぜか光瀬は満足げだ。

「ロマン？」

「そう、ロマン」

「じゃあ、光瀬はロマンを学びに大学に入ったのか？」

冗談でそう聞く僕に、光瀬は不思議そうな顔をした。

「比奈木は何だと思ってたんだ」

知らねえよ。

物理とロマンは僕の中でどうにもしっくり絡みあわない。

僕は光瀬の頭の中から辞書を引っ張り出して『ロマン』の項目を引いてみたくなった。

そこには現代物理学の数式がびっしり書き込まれているのだろうか。いや、もしかしたら「俺の活力」と、書いてあるのかもしれない。

第3話 イジメ

「しかし、分からないんだよなあ。シュレーディンガーの気持ちが」
光瀬はバスの窓から外を見ながら不満そうに言った。

「何が？」

「あの思考実験さ」

「分からなくも無いんじゃない？ シュレーディンガーはアインシュタインと同じで、不確定な量子論に反発したかったんだろ？」

「そうじゃなくてさ、猫だよ」

「猫？」

「なんでマウスじゃなくて猫にしたんだろう」

「まあ、本当に実験するわけじゃないから何でも良かったんじゃない？」

そろそろ僕も、光瀬の質問に飽きてきた。

「じゃあ、人間でもいいのか？」

僕のいい加減さが伝わったのか、光瀬は少しむっとした声を出した。
こうなったら本当にこいつは面倒くさい。

「そりゃ倫理的に大問題だろ」

「じゃあ猫だって大問題だ。思考の上でも殺すのは不憫だよ」

「光瀬は猫好きなんだな」

僕は思わず笑った。

「比奈木は？」

「僕も嫌いじゃないよ。実家でずっと飼ってた。ギネスに載りそう
なほど長生きしたよ」

「そうか、よかった」

どういうわけか、この日一番嬉しそうに彼は笑った。

もしも純情な少女だったら、この優しい人とずっと一緒にいたいと

思うような類の笑顔だ。

自分が男で本当に良かった。

こいつに恋したらきつと大変だろう。

アパートに一番近い停留所で僕はバスを降りた。

ここからアパートまでは徒歩で15分。ちよつと不便なのが難点だが、静かで落ち着いた雰囲気この街は、学生にとっては住みやすく、気に入っている。

僕の苦手な匂いを出す銀杏の季節も終わり、ほとんど葉は落としてしまったが、騒然と並ぶイチョウの木はとても圧巻だ。

イチョウ並木の筋を折れ、少し年季の入った民家や学生寮が軒を並べる細い筋に入ったところで急に光瀬が足を止めた。

「どうした？」

僕はそう言いながら光瀬の視線の先を見た。

「あ」

僕らの数十メートル先にソラがいた。そしてそれを取り囲むように3人の少年が並んでいる。

ソラよりも背格好は大きいが、おそらく彼らは中学の仲間なのだろう。

ソラがあまりにも規格外に小柄なのだ。そんな部分はとても親近感が湧く。

けれども彼らの様子はとても友好的なものには感じられなかった。

怯えた表情のソラが一步後ろに下がるたび、3人はワザと肩をいからせて威嚇するようにソラに近づいてゆく。

腹を空かせたハイエナが群れからはぐれたリカオンににじり寄っていく姿に似ている。

いや、しかし、あれは生きていくための正当な行為。

目の前の「それ」は人間の子供特有の一番忌むべき行為だ。

逃げようと向きを変えたソラの腕を一番体つきの大きな少年がつかんだ。

バランスを崩して地面に倒れ込んだソラを3人が面白そう笑った。僕はゾワツと怒りが頭に登って行くのを感じ、隣の光瀬に叫んだ。

「止めなきゃ」

しかしそれを聞く前に光瀬は弾かれたように少年達の方へ走り出していた。

「光瀬！」

止めに入るのか？ 怒鳴るのか？ 殴るのか？

いつも飄々としている光瀬の、怒った姿を僕は知らない。

普段おとなしいヤツがキレたら恐ろしいというのは、けっこう知れ渡ってる常識だ。

ソラは光瀬が弟のように可愛がってる少年なのだ。ただで済むわけがない。

しかし暴力はだめだ。無理だ。年齢差ゆえ正当防衛にならないじゃないか。

僕は光瀬のあとを追いながら心臓がバクバクするのを感じていた。

勢いよく走って来た光瀬に気づき、少年達が振り向いた。

倒れたままのソラも驚いたように目を見開いている。3人の少年は一瞬間を引きつらせた。

それはそうだろう。イジメの真っ最中に身長180センチはあろうかという長身の男が怖い顔で突進してきたのだから。

どうする僕。止めるか？ 止めるのか？ 殴る前に止めるのが僕の役目なのか？ やっぱりそうだな。

「光瀬！」

やっと追いついた僕は光瀬の肩に手をかけた。

けれども覗き込んだ光瀬の顔は予想に反して穏やかなものだった。それどころか、薄く笑っている。

青ざめて見上げている3人の少年に光瀬は、その穏やかな表情のまま楽しそう言った。

「なあ君たちさあ、面白い実験があるんだけど、これから一緒に見に行かないか？」

第4話 陰湿

「な、何だよあんた。何であんたに付いて行かなきゃなんないんだよ」

さつきソラを引きずり倒した背の高い少年が言った。光瀬ほどではないが170センチはあるだろう。

まあ、彼の疑問はもつともだ。

大学生に対してタメ口というのは気に入らないが、僕だってそう言うだろう。「『実験』ってなんだ」と。

「ついて来た方がいいよ。君たちの為に言ってるんだ」

相変わらず余裕の笑みで誘う光瀬を、僕も3人の少年も訝しげに見つめた。

けれど、

「君たち3人は、猫が好きかな？」

と言いながら自分の携帯を取り出してカメラのレンズを指さした光瀬に、少年3人は急におびえた表情になった。

なぜだ？

「一緒に行くよね。君らが仕掛けた実験だ。そして、実験は結果を見るためのものだ」

もちろん僕にはその光瀬の言葉の意味がまるで分からない。

けれど驚いたことに3人の少年は仲間同士で顔を見合わせたあと、おとなしく光瀬にしたがって歩き出した。

なんだ？ どういう事？ 訳がわからないのは僕だけなのか？

光瀬の後ろを、まるで亡者のように3人の少年はゾロゾロと不安そうについていく。

「いったいどんな呪文をかけたんだろう」と、僕がソラに聞くと、

ソラはただ肩をすくめるだけだった。

彼も知らないのだろう。

仕方なしに、僕とソラも彼らのあとに続いた。

どうやらあの3人は学校でも頻繁にソラに絡んできているらしい。

並んで歩きながら、ソラはポツリポツリと話してくれた。

ぶつかって服が汚れたあの、ソラは家を持たずホームレスのような生活をしているのだの、妙な病気を持っているのだの、よく分からない難癖をつけてはソラに絡むのだという。

1カ月一緒に寝起きしているが、そんな学校でのイジメのことは少しも知らなかった。

光瀬にも相談したことは無いという。そんなソラが意地らしくて不憫で、そして自分が不甲斐なくて辛かった。

イジメを目撃した光瀬は、きっとそれ以上にはらわたが煮えくりかえっているのではないだろうか。

「今回の化学のテスト、今までにないほどいい点を取ったんです、ボク」

ソラは照れながら、突然そう言った。

「へえー。良かったじゃない」

「光兄みつにいのおかげです」

「光瀬の？」

「光兄が元素について徹夜で教えてくれたんです。水素、ヘリウム、リチウム、ベリリウム……。ただ順番に覚えるだけの退屈な周期表がぼくは嫌いだっただけで、光兄は素粒子の話からじっくり教えてくれたんです」

「クオークからってこと？」

「はい。電子は素粒子だったんですね。陽子も中性子も素粒子であるクオークから出来ていて、その同じものの組み合わせで、この世の全ての物質が出来ているんだよって。いっぱい図を書いて、教え

てくれました」

「そうだけど、・・・でもテストに出ない知識ばかり詰め込まれて迷惑だったんじゃない？」

「いえ、ただ順番に丸暗記するだけだった元素に、すごく愛着を感じることができました」

「物理はロマンだつて言われなかった？」

僕は笑いながら聞いた。

「はい。ロマンだそうです」

ソラが、色白で中性的な顔をほころばせて笑った。

「そのお陰でよくトップの成績を取れたんだけど、・・・あの3人がカンニングをしてるのを見たつて言ってきたんです」

「は？」

「先生やみんなにバラして欲しくなかったら何でも俺たちの言うことを聞けつて。昨日は、学校から家まで裸で帰れつて言われて。もちろん、無視して帰りましたけど」

「バカバカしい！ やっぱり光瀬に殴らせておけばよかった」

僕はあまりにも低レベルな言いがかりと陰湿なやり方に思わず声をあげ、前を歩く3人を睨みつけた。

「光兄はそんな乱暴なことしませんよ」

「・・・残念ながら、そうみたいだね。そのかわり3人を処刑場にも連れて行くのかな」

「まさか」

ソラはカラリと笑った。

第5話 ブラックボックス

処刑場に行くには余りにも爽やかな風が僕らの頬をなでた。

歩いたのはほんの5、6分くらいだろうか。

光瀬が足を止めたのは、もう何年も放置されている朽ちかけた民家の前だった。

門扉はなく、ただ伸び放題の雑草が、庭への侵入を阻んでいる。この家はけっこう悪名高い。

近隣の住民が文句を言っても自治体が動いてくれず、ちょっとしたお化け屋敷と化していた。

誰かが不法投棄していったタイヤや家電製品、廃材が雑草に埋もれて転がっている。

光瀬は敷地内に入っていくと、雨ざらしで錆びかけた黒い小型冷蔵庫の横に立った。

最近ではお目にかからない旧式ワンドア、高さ80センチくらいの冷蔵庫だ。

おとなしく付いてきた少年達は更に不安そうな表情でお互いを見合っている。

いったい何が始まるというのだろう。

ソラも不思議がっているだろうと横を見ると、彼は光瀬の方を目を輝かせて見つめている。

きっとソラに取って光瀬は兄というよりカリスマ的存在なのだろう。何をやり出すか好奇心満々と言った目だ。

ただの偏屈な物理オタクなんだということを、早いうちに教えてやった方がいいだろうか。

それにしても少年達はなぜあんな理不尽な誘いに乗ってきたのだろ

う。

光瀬と彼らにすでに接点があったのだろうか。
けれど少年たちの様子から、とてもそうは思えない。

光瀬はポンと土埃とサビまみれの黒い冷蔵庫を叩き、3人の少年を見渡したあと言った。

「さて、一番背の高い少年Aくん。この中には何が入ってると思う？」

「な・・・何って、何だよ」

少年Aと呼ばれたことに反論する余裕もないほど少年Aはたじろいでいた。

先程見てきた映画にも「少年A」「少年B」が出てきた。

いずれも犯罪者だったことを知ったらこの少年Aは怒るだろうか。

光瀬は眉を上下させてもう一度丁寧に少年達に聞いた。

「このドアを開けて、中を確かめる勇気が君たちにはあるかい？」

背の高いキツネ顔の少年Aが嫌なものでも見るように眉をひそめた。
色の浅黒い痩せた少年Bと、少し肥満気味の少年Cが顔を見合わせる。

「何の事ですか。こんな冷蔵庫興味ありませんよ。変な言いばかりを付けるんなら僕らにも考えがあります」

少年Aはここへ来て敬語だ。逆に好戦的だ。

「お、いいね少年A」

「少年Aじゃありません！」

やっと彼は光瀬の付けたネームに反論した。

「けれど少年A。君たち3人がここまで素直に付いてきたのには、理由があるんじゃないか？ 後ろめたいことが」

そう言って光瀬はさつきと同じように自分の携帯を3人の前にかざした。まるで印籠を罪人にかざす水戸黄門ドラマのクライマックス

シーンのようだ。

僕はなんだか面白くなって、口を挟まず成り行きを見ることにした。ソラも僕のためでクルリとした目をさらに大きくして4人を見つめている。

光瀬はポンともう一度冷蔵庫を叩くと、

「よし、3人を代表して少年A、君がこのドアを開け」

「は？ なんですかそれ」

少年Aは更に顔を歪めた。

「あれ？ おかしいな。君たちは実験してたんじゃないのか？ 昨日、この時間、ここで、このブラックボックスを使って」 昨

第6話 箱の中の解

「・・・」

3人は、『やはり見られてたんだ』と言わんばかりの分かりやすいリアクションでお互いを見やった。

「そう。俺見てたんだよね昨日。君たち3人が小さな仔猫をどこから拾ってきて、この廃棄された冷蔵庫の中に笑いながら放り込むのを。秋とはいえ日差しは今日よりかなり強く、パツキンで酸素も取り入れられないこの黒い鉄の箱の中は、生まれて間もない仔猫には快適とは言えない環境だったんじゃないかな。正気の沙汰じゃないよね」

少年達は更に青ざめたが、聞いていた僕も不快感に胃が重くなり、思わず拳を握りしめた。

「俺はそこでハッと気がついたんだ」

光瀬は一人芝居をする役者のように、大げさに手を広げ、その手をパンと打った。

「これは実験なんだ、と。今まさにこの3人の少年は世紀の大発見をしたんじゃないだろうか。電気の入ってない冷蔵庫の中を、新たな力を使って快適空間に出来るのかもしれない。いや、もしかしたらタイムマシンになっついて、フタを開けると中の仔猫は大人になっているのかもしれない。俺はこの世紀の大発見を記録すべく、この携帯のビデオカメラで君たちの様子を全て録画したんだ」

早口でそう言うと、光瀬はもう一度携帯を彼らの前にかざした。

「と・・・撮ったのか？」

太っちょの少年Cが青い顔で思わずそう言った。

「安心していいよ。この携帯のビデオカメラはかなりの高画質高機能なんだ。君たちの顔も、楽しそうな笑い声も会話も、とてもクリ

アに収めることができた」

少年3人はもう顔を見合わせることもせず、そのメタリックレッドの携帯を見つめたまま固まってしまった。

“よし！”

僕は思わず握った拳をガッツポーズに変えた。

虐待の証拠を掴んだんだ。仔猫もきつと光瀬が救出したんだろう。少年達は見られてしまったのかと思い取りあえずここまで来たが、まさかビデオ録画されてるとまでは思わなかったに違いない。

今はじめて僕の中で光瀬が神々しく光り輝いた。

「さあ、今からまた動画の続きを撮る。実験の結果を見ようよ、博士たち。ナレーションが必要なら俺が入れてあげるよ。何と入れたい？『箱の中の仔猫は果たしてどうなっているでしょうか！』にしようか？」

そう言いながら光瀬はビデオカメラのスイッチを押した。携帯のレンズの下に、録画中のランプが点灯する。

「そ・・・そんなの。猫はあんたがもう外に出しちゃったんだろ？中にいるわけじゃないじゃないか」

痩せぎすの少年Bが言った。AもCも、思わず頷く。

「は？俺が猫を逃がすだって？まさか。あり得ないね。仮にも俺は物理学を志すものだ。実験がどれほど大事なものか知ってる。人の実験を途中でぶち壊すなんて事あり得ないよ。箱の中はそのままだ」

光瀬は本当に心外だとばかりに肩をすくめた。

え・・・。芝居だよな。

僕は思わず苦笑いをした。

握った手が汗ばんできた。隣をみると、ソラも固唾を呑んで見守っている。

・・・違うのか？ 芝居じゃないのか？

「あー、もう録画時間が終わっちゃうよ。博士たち、早く頼みますよ。うまくいったらホームページに載せるんだから。少年3人による、恐怖の大実験！ って見出しを付けて」

その言葉に3人はギョツとした顔で光瀬を見た。

「俺のホームページさあ、18禁にしてあるのにけっこうな閲覧者が来るんだよね。来るのは君たちみたいな中学生ばかりかもしれないな。グロイのや、ヤバイのや、イタイのが好きなお子様かね」

え・・・。

「昨日の君たちの録画はPC用にもう編集してあるんだ。今日君たちに出会えてよかった。あれだけじゃ、面白くないもんね。ドラマも実験も結末が大事だ。この扉を開けた映像とセットにして今夜あたり更新しようと思ってるんだ。なあ、どうかな」

光瀬はニヤリと笑った。どこか狂気じみた笑いにも見える。

・・・なんだ？ 趣旨が変わってきてないか？

なんだそのHPっていうのは。なんだR18っていうのは。

「バ・・・バカじゃない？ あんたイカれてるよ」

「そうだよ、僕らはちよつと・・・」

「え？ 聞こえないなあ。ちよつと、何？」

たじろぐ少年達に光瀬は更に微笑みかける。

なんだ？ さっきまでヒーローだった光瀬の顔が、まるで悪魔に見えてきた。これは・・・何だ？

「さあさあ、博士たち、早く中を見せてくださいよ。博士達も見たいでしょ？ この中身を。しっかり録画してあげるからさあ、世界中に見せてやるうよ」

そう言えば僕は光瀬の事をあまりよく知らない。

同じ工科大に通い、ルームシェアしている物理オタクだということくらいだ。

照りつける陽射しのせいか、少し吐き気がしてきた。

箱の中には解がある。

僕の知らない『光瀬』という男にまつわる解が。

今一番、そのブラックボックスを開けて欲しくないのは僕かもしれない。

扉を開くまで答えは確定していないというシュレーディンガーのパラドックス。

願わくば、今もそうであって欲しい。

その目の前の箱の中の仔猫の生死は、まだ決まっていなければならない。

だったら僕はこの3人の少年に、決して箱を開けさせない。

そうすれば、猫の生死は永遠に決定しないのだから。

「さあ、早くドアを開けてよ、博士たち」

光瀬の声が、楽しそうに響いた。

第7話 ひどい奴

少年達は顔を引きつらせながらジリジリと冷蔵庫から離れた。どうにかしてこの状況から逃げ出したいらしい。

「あれ？ 見ないの？」

光瀬がつまらなさそうに言い、そして不意に笑う。

二重だが切れ長の涼しげな目、スツキリと通った鼻筋、少し長めの前髪が目元に陰りを落とす。

意味ありげに笑うと、それら全てがゾツとするような狂気じみた怪しさを醸し出す。

僕と一緒に住んでいたのは、本当にこいつだったのだろうか。

「う・・・うん。実験は中止します。僕たち、帰るから」

目を合わせないようにゆっくりと後退していく少年3人。

「なんだ、残念だなあ。楽しみにしてたのに」

カ lari と光瀬が言うのと、3人は申し合わせたように今来た方向に走り出した。アスファルトと溝蓋の段差につまづきそうになりながらあれ？ 行っちゃうよ？ いいのか、光瀬。

そう思った矢先、鋭く光瀬が少年達を呼び止めた。

「ちよつと待て！ そのA、B、C！」

20メートル先で、雷に打たれたように立ち止まる3人！

僕とソラも、ぴりりとした空気に緊張し、固まった。

光瀬はスツと首を伸ばし、よく通る声を少年達に投げつけた。

「いいかお前ら。二度とソラに悪さをするな。もしもまたソラを標的にするようだったらこの映像は関係各所に配信する。それからついでにソラをいじめるヤツがいたら、おまえ達が守れ。いいな。これがおまえ達の悪事との交換条件だ。簡単なことだろ？ 守れるよな？」

有無を言わさぬ気迫に、少年達は口々に「はい！」と叫ぶと、再び全速力で走り去っていつてしまった。

乾いた風が巻き立てたホコリっぽい匂いが辺りに残った。

「バカな中坊だなあ」

光瀬はゆっくり振り向くと、のんびりとした声で僕らに笑いかけた。

「ありがとね、光兄」

「おう！　かわいい弟を虐めるヤツは許しちゃおかねえ」

芝居がかった口調で言う光瀬に、ソラが嬉しそうに笑った。

けれど「ソラも、もう少し強くならなきゃダメだぞ」と、忠告するのも忘れなかった。

一件落着。

・・・一件落着なのか？

「光瀬」

僕は恐る恐る聞いてみた。

「猫は・・・猫はどうなったんだ？」

そう言った瞬間、光瀬の顔がサツと曇った。

僕はそれを見逃さない。

「なあ、猫はどうなっちゃったんだよ」

僕はその不気味に錆び付いた黒い箱に目をやりながら、もう一度聞いた。

「比奈木・・・残念だよ」

光瀬がさらに顔を曇らせた。

「残念って何だよ」

「開けてみるよ、このドア」

「嫌だよ。なんで僕が開けるんだよ」

「君が酷いヤツだからだ」

「僕の何がひどいんだよ」

「比奈木はこの中の猫が生きてると思う？ 死んでると思う？」

「そ、そんなのわかんないよ。考えたくもない」

「生きてると思う？」

「そりゃあ、生きていて欲しい」

「死んでると思う？」

「・・・死んじゃってるのか？」

「君はやっぱり酷いやつだ」

「だからなんでだよ！ ひどいのは光瀬だろ」

「よく見て」

光瀬は僕の肩を持ち、グツと前屈みにさせると勢いよくその黒いドアを開けた。

目を閉じる暇も無かった。

使い古した冷蔵庫特有のムンとした嫌な匂いが鼻をつく。

けれど中身は空っぽだった。

ポツカリあいた庫内は、ハナマルをあげたいほど綺麗で何もなかった。

「カラッポだ」

「当たり前だろ？」

光瀬はしゃがみ込んだ僕の横に同じようにしゃがみ込むと、顔をぐつと近づけて不満そうに言った。

「比奈木は俺をなんだと思ってたんだ。さっき言ったばかりだろ？」

俺は猫好きなんだぞ」

横でソラが堪えきれないように笑い出した。

ソラはきつと光瀬が猫を救出したのを疑わなかったのだろう。

そりゃあ、おかしいはずだ。

僕も最初は疑いもしなかったのに。

「ごめんな光瀬。そう思ってたんだけど余りにも光瀬が迫真の演技だったんでさ。本当にそんなマツドな人間じゃないかと一瞬思った」

「お、そうか？　じゃあ、あの3人も騙せたかな」

「気の毒なほど騙されたと思うよ。だから動画は消してやれよ」

「は？　動画？　そんなもん無いよ」

「あ？」

「昨日たまたま奴らが猫を放り込むのを見かけただけで。動画なんて撮ってないよ。そんな趣味もない」

「なんだ、・・・そうなのか」

まったくどこからどこまでがウソなのか分からない。

光瀬は役者より詐欺師に向いていると激しく思う。

「まさかまたあの3人に出くわすとは思わなかったよ。しかもソラを虐めてる奴らだったとはね。ソラのかたきも打てて良かった」

光瀬はご機嫌に笑った。

なんだか僕一人ハラハラして少しばかり損した気分だ。

そんな僕に気付いたのか、ソラは「ごめんなさい」と謝ってきた。

「光兄から子猫を助けた話は聞いていたんです。でも、あの連中が犯人だなんて知らなくて。途中で気が付いたんだけど、光兄のお芝居に圧倒されて説明する暇がなかったんです」

相変わらず、かわいい奴だ。

「いや、ソラが謝る事じゃないって」

僕がそう言うのと光瀬はうんうんと頷き、「そうだ。俺を信用しない比奈木が悪い」と何度も言った。

このあと僕たち3人はどうでも良いことで談笑しながらアパートに帰るのだが、

僕はアパートの鍵を開ける時になって、ある疑問にかられた。

“ 光瀬が助けた猫は、どうしたんだろう ”

その答えはドアを開けた向こう側にあった。

白と黒の手のひらサイズの可愛らしい子猫が、僕らを出迎えるように玄関マットの上にちょこんと座り、小さな声でミャーンと泣いた。

第8話 パラドックスとデコヒーレンス

ポンポンポンと、子猫は小さな手でピンポン玉をつつく。

コロコロコロと、部屋の隅に転がってゆくその玉を追いかけて、追い越して先回り。

そしてまた同じようにチヨイチヨイとピンクの肉球でピンポン玉をつつく。

飽きるまで繰り返す遊び。ガラス細工の藍色の目。ピンと立った長いしっぽ。

子猫というのは、どうしても可愛いのだろう。

けれど今は頬を緩めるわけにはいかない。

四畳半の僕の部屋の床に座り、この猫を飼う許しを請うために、光瀬とソラは神妙な顔で僕を見つめているのだ。

このアパートは大家が無類の猫好きだということで、ペットは猫までなら飼えることになっている。

そして僕自身も猫は好きだ。僕が反対する理由は何もない。それなのに……。

その僕に向かって、いつも態度のでかい光瀬が不安そうな顔で許可を求めているのだ。

一緒にいるソラには申し訳ないが、ここであんなに手はないだろう。

僕のいたずらが揺さぶられた。

「じゃあ何？　ここに猫を連れ込む準備をするために光瀬は今日、僕を映画に誘ったのか？」

少し不機嫌な声を出してみた。

「まあ……それもある」

「それも？」

「いえ、まさにその為です」

光瀬は叱られた小学生のような顔をした。昼間中学生をこらしめた人物とは、とても思えない。

「僕を連れだして、ネコトイレや餌や首輪や爪研ぎなんかをソラに用意させたわけ？　そこまで準備したら、猫を追い出しにくいだろうと考えて？」

「反論の余地ありません」

光瀬は兵隊のようにキリリと答えた。

あれ？

光瀬も少し冗談モードに入っただろうか。

僕が本気で怒ってないのがバレてるんだろうか。

ぴよこんと子猫が僕らの間に飛び込み、ヒョイと二本足で立つと、ピンポン玉めがけてジャンプした。

勢い余ってコロリと一回転。

その仕草が可愛くて、僕は思わずクスクスと笑ってしまった。

光瀬とソラは顔を見合わせてニンマリした。僕の芝居もここまでか。しかし・・・それでは悔しい。

「じゃあ、こうしようよ。光瀬がシュレーディングアの猫のパラドックスを解いたらこの猫を飼ってもいいよ」

あくまで主導権を握りたい僕は、苦し紛れにそう言ってみた。

シュレーディングアの猫に、そんなに興味は無かったのに。

「シュレーディングアの猫のパラドックスの解？　・・・本気で言ってる？」

光瀬は嫌なものでも見たように眉をひそめた。

「え？　光瀬は知ってるんだろ？」

「そりゃあ、すでにいろんな説があるからね」

「じゃあ、一番光瀬が正しいと思う答えでパラドックスを説明してよ。箱の中の猫が、原子核崩壊の不確定性原理である『重ね合わせ』に連動していながら、死んでいながら生きているという奇妙な状況にならない訳を」

「2番目に正しいと思う答えでいいか？」

「なんで2番目なんだよ。1番でいいだろ？」

僕が突っ込むと、ソラも頷いた。

ソラはシュレーディンガーの猫の話など知らないだろうに、光瀬の口から出てくるものは何だって楽しみにする習性がある。

どこか、無邪気な子犬のようなヤツだ。

「2番目でいいか？」

「しつこいな。いいよ。じゃあ、2番目で」

そもそも1番でも2番でも僕はどっちでもよかった。ただ、弾みで言っただけなのだから。

「シュレーディンガーには申し訳ないが、このパラドックスはまろきり成立してないんだよ」

光瀬は滑らかな口調で切り出した。

「ミクロの素粒子の振る舞いを、マクロの猫に連動させてみようとしたのは分かるが、その世界の壁はとても厚いんだ。あつちの世界とこつちの世界はまるで違う。『あなたと私は住む世界が違うのよ！』ってドラマでヒロインが泣きながら叫ぶよりも、もっと世界が違うんだ」

「よけいな例題はいいから」

「つまりは、ミクロの世界の現象である原子核の崩壊を、マクロの住人である放射線探知機に探知させようとした段階で、すでに第一のデコヒーレンスが起きている」

「デコヒーレンス？」

僕は聞き慣れない言葉を復唱してみた。

「そう、デコヒーレンス。つまりは、『そのこと』が、ある事象に何らかの影響を与えてしまうことだよ。ほら、例えば電子の存在は、観測すること自体が電子に影響を与えてしまうだろ？ そのせいで位置や速さが特定できない。つまりは観測自体がデコヒーレンスなんだよ。ついでに言うと、猫が息をしたり熱を放出することだってめっちゃくちゃデコヒーレンス。もうパラドックスどころじゃない」
光瀬はニンマリした。

「量子の世界はあやふやなんだと言ったハイゼンベルグに反論した意気込みは認めるけど、やはりこの思考実験には無理があっただんだよ」

「ちょっと可愛そうな気もするな。量子の世界はそうなんだから追求するなって言われたら、物理学者として反論したくなる気持ちも分かるけどな」

僕がそう言うと、ソラが少し不服そうに呟いた。

「猫を使うからダメなんだ。実験に猫を使うから」

物理と関係のない、そんなところで反論するソラが可愛くて、僕も光瀬もプツと笑った。

しかし案外的を得ているかもしれない。

猫を使わなければ、この思考実験にとまなう少々不快な後ろめたさくらいは軽減されたのかも知れない。

第9話 もうひとつの解

「仕方ないな。猫は飼ってもいいよ」

しぶしぶ、と言った感じで承諾した僕にソラは「ありがとう」と嬉しそうに笑った。

全部僕のお芝居だと分かっていただろうに、なんとも律儀な子だ。

光瀬はさっそく子猫を抱きあげ、顔を見ながら名前を考え始めている。

「よし、シュレちゃんだ」

「物理から離れろ!」

僕が反論すると、スツと近づいてきたソラが光瀬に向かって無邪気に言った。

「ねえ、1番は?」

「え? 1番? そんな名前変だろ」

僕がそう言つとソラは笑って首を横に振った。

「そうじゃなくてさ、さっきのは光兄が2番目に正しいと思った答えでしょ? 1番目はなんだったの?」

もうすっかり終わってしまったパラドックスの話を、なぜかソラが再び蒸し返した。

正直、僕はそんな話どうでも良かった。休みの日に物理の話を延々とするのは疲れる。

「聞かない方がいいよ、ソラ。どうせくだらないオチで終わるんだから」

「え? そうなの?」

「そうに決まってる」

僕が断定的に言つと、さすがに黙って聞いていた光瀬も、ムツとし

た表情をして子猫を床に降ろした。

「俺が今までにくだらなないオチで話を終わらせたことがあるか？
比奈木」

「そうじゃなかった事が記憶にない」

「記憶回路の故障だな」

「人をロボットのように言っな」

「・・・ふ」

「何で笑うんだよ」

「ねえねえ、一番はなあに？」

再びソラが僕らの突っ込み合いに入り込んできた。こういうところは妙に頑固な子だ。

「聞きたい？ シュレーディングアのパドックスの解」

光瀬が改まった声を出し、僕とソラの前に座った。三角座りだ。

「うん、聞きたい」

ソラが目を輝かせた。

何度も言うようだが、ソラはシュレーディングアの猫が何なのかも知らないはずだ。

まだ元素記号を暗記するレベルの14歳だ。

彼はいったい何が楽しいんだろう。女の子のように長いまつげの、ぱっちりとした目でじつと光瀬を見つめている。

「知ってるんだったら勿体つけずに言ったらいいじゃないか」

僕はウンザリしてそう言ってみた。

「デコヒーレンスだよ」

「それはさっき聞いたよ」

「なぜデコヒーレンスが起きるんだと思う？」

「え？」

「玉手箱や鶴の恩返し of 障子じゃあるまいしさ。どうしてちょっと

干渉しただけでパラドックスが崩れて消えてしまっただけ？」

「それは量子のこと？」

「シュレーディンガーの猫の話だよ。なぜ、ミクロの世界をマクロの世界に持って来れない？ 反映できない？ 同じ一つの世界なのに。小さいってだけで、どうして覗けない？」

僕とソラは顔を見合わせた。ちよつと光瀬の顔が怖かった。

「なんで？」

「バレてしまうからさ」

「ん？」

「量子の秘密が何なのかが、バレてしまうからだよ。だから何らかの力が二つの世界に壁を作った。パラドックスにデコヒーレンスを与えて解けなくしたんだ」

「ごめん、よく分からないよ」

僕は両手をあげて、降参のポーズを作った。

「じゃあ、話を簡単にしよう」

光瀬はニコリと笑った。

最初からそうして欲しかった。

第10話 だから彼は語らない

「僕らの体は何でできている？」

と光瀬が言っていると、ソラは得意げに「細胞」と言った。

「うん、けどな、もっともつと細かくしていけば、どうだ？」

「分子？・・・あ、元素、・・・電子・・・素粒子！」

「うん、そうだな。電子も素粒子だ。いまのところ、これ以上分解できないとされている最小単位が素粒子。素粒子の世界、それが量子の世界だ」

先生と生徒のような、微笑ましいやり取りが始まった。

僕はただじつと聞くことにした。

「そして人間だけじゃなくて、この星もこの宇宙も、すべての物質は素粒子でできている。どんなに調べたって確立でしか表せないよ
うな、不確かなものの集合で、この世界はできてる」

「何か妙だね」

「妙だろ？ この世界は、実はとってもあやふやなものなのかも知れない」

「人間も？」

「うん、人間も」

光瀬はニコリと笑った。

「素粒子ってやつは観測しても、とびとびの値しか出ないんだ。ほ
ら、ここからキッチンまで歩いたとすると、普通それは途切れるこ
とのない、一連の動きだろ？」

「う・・・うん」

「でも素粒子・・・つまり量子の世界の住人は違うんだ。ここに居
たと思ったら次はあそこ。その次はもっと向こうに居る。『間』が
無いんだ」

そつだ。確かにそんなことを授業で習った気がする。僕も興味深く聞いた。

「なんだかユーレイみたい」

ソラが笑った。

「うーん、幽霊か。ちょっと非科学的だな。これって、何かに似てないか？ 比奈木」

「え？ 僕？」

急に振られて、ボートとしていた僕はドキリとした。

居眠りをしていて怒られた中学時代を思い出す。

「何だろう。とびとび・・・って」

「とびとびなんだ。間だが無い。0（ゼロ）か1なんだ。0・5とか0・7とかは無い」

「あ？ コンピューター？ 2進法のコンピューターだ」

「そう。あれほど複雑な処理をやったのけるコンピューターの頭脳はすべて0と1だよな」

「とびとびで、間だが無い。0と1意外は無い・・・」

僕は何とも不快な気分になっていた。

なんだ、この気持ちは。

「なんか、妙な気分になってこない？」

まるで心を見透かしたように絶妙のタイミングで言った光瀬を、僕は見つめた。

「この世には知らない方がいいってことだつて、あるのかもしれないよ。デコヒーレンスで壁を作らなければ知られてしまう何かを、

『彼』は隠しているのかも知れないね」

「彼って、誰？」

「彼は、彼だよ」

光瀬はニコツと笑った。

「そっかー。人間が頑張つてコンピューターを作ろうとするのは、

神様の真似ごとなんだね」

子猫の頭をなでながら、ソラはつまらなさそうにポツリと言った。
正解であるはずのないその呟きは、なぜか僕をドキリとさせた。

「なあ比奈木。僕らは量子論を学ぶけど、量子というのは到底理解出来る領域じゃないんだよ。難解な一般相対性理論を100%理解出来る人間が、この世に例えば3人居たとしても、量子を100%理解出来る人間はこの世には一人も居ない。無理なんだ。どんなに頑張ってもさ」

「だから・・・」

僕は口ごもった。けれど、僕の代わりにソラが続けた。

「だからシュレーディンガーの猫は成立しなかったんだね。邪魔されたんだね、彼に」

訳知り顔のソラに、光瀬が笑いかけた。

「そう。この世には知らない方がいいって事もあるってことさ」

コロコロコロと、ピンポン玉が僕の足元に転がってきた。
それを追ってまたふわふわの白黒の毛玉が転がって来る。
この可愛い生き物も、「とびとび」で出来ているのか。

「なんか、シュレーディンガーの猫って、すごい問題を含んでるんだなあ。そんなこと、思っても見なかったよ」

僕は真顔でつぶやいた。

「比奈木は素直だなあ」

「え？」

「信じたの？ 今の」

「・・・え？」

「まさか信じちゃった？ ちょっとでも」

「なに？ ウソだったの？」

大きな声に反応して子猫はぴくりと体を固くした。

「ウソも何も、俺ごときがそんな謎、解けるわけないだろ？ 量子の世界の謎を。俺に分かるのは・・・そうだな。シュレちゃんがこの実験に猫を使ったのは正解だということだけだよ。インパクトを狙った戦略であり、人々の記憶に残るためには成功したってことかな。腹立たしくはあるけど」

光瀬は子猫を抱き上げ、その鼻先にキスをした。

ボクにも抱かせてと、横でソラがはしゃぐ。

ミラクルワールドの扉を開きかけた気分だった僕は、一瞬にして現実に取り戻された。

いつもの僕ならここで不機嫌になるところだが、今はそんな気分になれなかった。

僕を作っている素粒子たちが、とびとびに僕の中を移動しているのを感じた。

本当は、この目の前にいる男は、全てを知ってナイショにしているのかもしれないという、バカバカしい考えが漂っていた。

「知らない方がいいってこと、あると思う？」

僕がポツリとそう訊くと、光瀬はゆっくり振り返った。

「あるかもな」

「じゃあ、物理学を追求することは怖いことなのかな。それとも意味のないこと？」

僕がそう言つと光瀬は、子猫をソラにそつと渡しながら笑った。

「そんなこと考えなくていいさ。物理は『ロマン』なんだよ。いつも言ってるだろ？」

「・・・ああ、そうだったな」

「ロマンは、追い求めるために存在するんだ。そういうもんさ」
「そういうもんかね」

僕も笑った。

ほら。光瀬のオチはいつだって、くだらない。

(END)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9095o/>

僕らの相対論2 シュレーディンガーの猫の章

2010年11月26日08時21分発行